

道

2024・3・27

通信 No 1775



馬酔木

本番まで 水曜日練習 残り 8回

本日の練習 6時30分～ 岡野中 3部 小坂先生 二宮先生

※同日 3時00分～ プログラム検討委員会 於 県民サポートセンター

次週水曜日練習 4/3(水) 6時30分～ 岡野中 1部 清水先生 小坂先生

※同日 2時30分～ 運営委員会 於 県民サポートセンター

<小笠原へ恐怖の航海 48時間> T-1 小林俊雄

生まれは三浦半島の先の海岸ペリー来航記念碑の隣で、家業は食堂、海の家や貸しボート、ヨット等の商売をしていた。故に海と親しみ、海の怖さを十分知っていた。これは約55年前の話です。

仕事は飲料水会社で東京は港区地域の一部と伊豆七島、小笠原諸島の担当マネージャーだった時、米国から返還直後の小笠原父島の市場開拓の命を受け東京竹芝ふ頭より父島へ向かう事になった。

竹芝ふ頭を午後5時の出港、乗船をしたのは560トンの小型貨客船黒潮丸だった。

出港後間もなく夕食になり食後、客室に戻り到着後のスケジュールを整理していた時、本船は揺れ始めた。

これは東京湾を出たな、と船室の丸窓から表を見たら、日はとっぴり暮れて三浦半島の剣崎沖を航行していた。伊豆大島を通過し三宅島から八丈島にさしかかる頃には深夜を過ぎていて更に本船のゆれは激しくなるばかり。

船体が大波の上に乗るとガラガラガラと空回りするスクリュー音の響き、横になり転がされないようにしっかりと両手で床に踏ん張る。

恐怖感で一睡もできずトイレは壁を伝え歩きして用を足す始末。子供の頃から海の怖さを知っていた私だったのに、翌日も揺れは続き、食事も出来ず売店で買った、飴玉などをしゃぶり一日を過ごした。

その状況が翌3日目の朝まで続いたが昼頃になると、私が見たいと期待していた大海原から天空を指で突き刺すような、高さ10数メートルある「そう婦岩」が見えはじめた。

暫く進み、午後過ぎになると遠方にかすかに島が見え始めた、もうすぐ父島に到着するんだ、とその安心感か疲れが出て暫くウトウトしていたら、急に海が穏やかになり、久しぶりに甲板に出ると父島二見湾内を航行していた。

最初に目についたのは戦時中に湾内で沈められた貨物船の残骸だった。

間もなく二見港に到着した。10時間以上の遅れでの到着。48時間もかかった。既に午後5時を過ぎていたが得意先の担当者が迎えに来てくれていて、身体がふらつき歩行困難な状況だった。荷物を宿に置き、さあ～これから仕事開始だ。頑張るぞ！ 島内の様子は又の機会にします。